もどかしい小考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2002-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 光浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1385

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

もどかし小考

吉田光浩

はじめに

「〔あなた(道綱)が〕ただいとかく悪しきものして物をまゐれば、いといたくやせ給ふを見るなん、いといみじき。かたち異にても、京にある人こそはと思へど、それなんいともどかしう見ゆることなれば、かくかく思ふ」
（かげろふ日記・中・天禄二年六月）

右は、「かげろふ日記」のいわゆる鳴滝参籠の記事に見える一節である。夫兼家の夜離れを嘆いて、道綱を連れ、山寺に籠もった作者であったが、慣れない山の食事に痩せ細った我が子を見て、出家を思いながらも思案に暮れる場面である。

「京にある人」については、兼家とする見方で、(注1)ほぼ問題はないものと思われるが、「もどかしう」の解釈を巡っては、諸説がみられる。それらは細部において異なるものの、大きくは、以下のようなふたつの方向性にまとめることができそうである。そのひとつは、自分が尼になっても、兼家は、息子の道綱を見捨てることはあるまいとは思うが、それも「人まかせとなって安心できない」（日本古典文学大系『蜻蛉日記』）、すなわち夫兼家が「あてにならない・期待できない」と

する解釈であり、もうひとつは、夫を恨み、子どもを見捨てて妻が軽々しく出家することは「非難の的となる（非難に当たる）」こととしてモドカシを解釈しようとする見方（新潮日本古典集成『蜻蛉日記』等）である。(注2)

ここでは、上記の例を手がかりとして、モドカシの語義を巡る問題について小考を述べておくことにする。なお、用例については、本稿末に掲げた参考文献によるが、表記については読解の便を考慮して、適宜改めたところがある。

一

まず、モドカシについて、現行の比較的規模の大きい古語辞典を取りあげて、その記述について検討を試みておくことにする。

『古語大辞典』（小学館）では、次の二項目が掲げられている（用例省略）。

①非難されるさま

②思うようにならず心がいらいらするさま。気掛かりだ。じれったい。

このうち、「①非難されるさま」は、「非難される状態にあること」すなわち、状態的意味であり、②は「心がいらいらする」との説明から理解されるように情意的意味として立項されている。一方、『角川古語大辞典』においても、同様の二項目が見られるが、①に相当する項目には「なげかわしい」の他、評価的意味として捉えられる「よくない」意が加えられており、②に相当する項目には「気掛かりだ」に代わって「はがゆい」意が示されている。(注3)また、『日本国語大辞典』（第二版）では、②に相当する項目は、ほぼ『古語大辞典』の内容と同じであるが、①に相当する項目に「気にくわない」意が加えられており、状態的意味を示す項目に情意的な側面をもつ意味が加えられている観がある。なお、『古語大辞典』の②の項目には、冒頭の「かげろふ日記」の一節が用例として採用されており、上記のふたつの解釈とは異なり、②の情意

的意味を、この場合の解釈として積極的に採用する立場をとるもののようである。

この他にも、取りあげるべき辞書は多くあるが、おおむねにおいて、モドカシには「非難されるべき状態である」意（状態的意味）と「心がいらいらする」意（情意的意味）のあることが、各辞書に共通して認められているようである。

このような辞書の記述を参考に、冒頭『かげろふ日記』の例について検討すると、前者の解釈に見られる「あてにならない」意は見当たらず、後者の解釈「非難に当たる」意に相当する項目は、いずれの辞書にも示されている。したがって、後者の解釈が妥当であるかのように思われるのである。また、近年の注釈では、やはり後者の立場をとるものが比較的多く、その妥当性が承認されつつあるように見受けられる。

しかしながら、この場面は、母親が我が子を前にして、その子の将来を案じ、それゆえに出家に踏み切れず、思案に暮れる心情が語られるところである。一方、後者の解釈は、妻が夫を恨み子供を捨てて出家すること自体が、社会的に「非難」を受けるとするものである。出家をしようとして、その気持ちを我が子に問わず語りに語るときに、自身の社会的な立場を考慮して思案に暮れるというのは、適切な解釈とは言い難い。この解釈が支持される根拠の一つとして、『源氏物語』帚木巻、いわゆる「雨夜の品さだめ」で左馬頭が語る、夫を恨んで尼になり、後悔をした女の話が持ち出されることもあるが、この場合、文脈として語られているのは、息子道綱の行く末についての懸念である。当然その言葉の背後には、兼家に対する不信があり、夫への不満を子供の将来の問題に重ね合わせて、我が子に語る母親の姿が浮かび上がってくるのである。そこには、自身の社会的な立場について考慮をはたらかせる余地はないものと思われる。

このように、「安心できない（あてにならない・期待できない）」とする解釈については、文脈的には問題はないが、辞書には直接この意味に相当する項目がなく、後者の解釈「非難に当たる」については、辞書の記述に合致はするが、文脈上の流れからいって問題があるように思われる。

そこで本稿においては、ここで問題となっているモドカシについて、その成立と語義の問題を考察することにより、冒

頭例について、解釈を試みることにする。

二

モドカシについては、その語形・語義の両面において、動詞モドクから派生した形容詞と考えて問題はないものと思われる。さらにモドクについては、「モドクとモドスは、そのままかえすという点で一致している」（大野晋『日本語の年輪』）との指摘があり、また、『大言海』に「戻るノ他動」、また「モドル（戻）の他動的動詞モドク（抵牾）」（吉田金彦『語源辞典―形容詞編―』）との記述も見られ、モドクはモドルと語根を共有するという見方で一致しているようである。

動詞モドクは、語構成の点から考えて、比較的早くに成立したものと考えられるのであるが、現段階において、上代語としての確例は見いだし得ない。強いて挙げるとすれば、『万葉集』の「大宰帥大伴卿酒を讃むる歌十三首」にある次の歌の一訓法に動詞モドク一例を見いだすことができるのみである。

あなみにく賢しらをすと酒飲まで人を⿱孰夊見者猿にかも似る　（万葉集・巻第三・三四三）

「⿱孰夊見者」の訓については、「にくむは」、あるいは「よくみば」「よくみれば」など異同の激しいところであるが、神田本・京大本・類聚古集では「もとくは」との訓がみられる。また、「⿱孰夊」字そのものについては、『新撰字鏡』『類聚名義抄』等に記述は見られないが、中世の『温故知新書』および『塵芥』等には、その異体字「熟」にモトクの訓が見いだされ、先行する資料において「⿱孰夊」が「モドク」と読まれた可能性は十分に考えられる。したがって、『万葉集』のこの訓が正しいとすれば、これを上代のモドクの例として挙げることができるのであるが、確例とするにはなお考察すべき点を残しており、ここでは、ひとつの可能性に留めざるを得ない。したがって、モドクについては、現段階では上代の確かな例は見当たらず、書紀古訓や『日本霊異記』の訓釈の他、管見の限り中古初期の訓点資料にも見いだし得ない。確実なところでは、

中古以降の次のような和文資料に散見する例を待つ他はないようである。

「あはれ、今様は、女も数珠ひきさげ、経ひきさげぬなし」と聞きし時、「あな、まさり顔な。さる者ぞやもめになるてふ」などもどきし心はいづちかゆきけむ。（かげろふ日記・天禄二年四月）

この七歳なる子、父をもどきて、高麗人と書作り交はしければ、おほやけに聞こしめして、（うつほ物語・俊蔭）

前者『かげろふ日記』のモドクは「非難する」意の例であり、『うつほ物語』の場合は、「まねる」意の例である。いずれもモドクが和文に用いられた、比較的早いものと考えられる。

このような例により、モドクには、基本的に次のような二義が認められている。

①他に反発して逆らう。また、他を非難する。

②他をまねる。（角川古語大辞典）

この両義には、一見、懸隔があるものと思われるが、その共通[注4]するところは、他人の行為を捉えて、みずからたどり示すことであると考えられる。すなわち、他人の行為を見て、「自分だったらそのようにはしない（このようにする）」と、具体的な行為として示してみせることが「真似る」意となり、それを口に出して言うことが「非難する」意として用いられるようになったものと考えられる。すなわち、具体的な動作を伴う行為と言語行為との相違である。

このように動詞モドクにはふたつの語義が認められるが、それらは、動詞の場合と同じく、中古以降になって用例を拾うことのできる形容詞モドカシを派生する際に、均等には伝えられなかったようである。この点については、「真似をする意が、形容詞『もどかし』と関連することはなく」、もっぱら「非難する」意が形容詞の意と関連しているとの指摘（松浦照子「もどかし」〈『講座日本語の語彙』第十一巻所収〉）があり、同論考では、その伝えられなかった理由について、動詞モドクの「非難する」意が「まねる」意よりも優勢[注5]に用いられた点にもとめられる。実際に中古に使用されたモドクのそれぞれについて、その意味を検討すると、圧倒的に「非難する」意のものが多く、「まねる」意のものは、例外的に見い

だすことができるのみである。したがって、これらの「派生もとの語の使用状況」に基づく説明は首肯されるのであるが、後世の芸能における「もどき」[注6]の例や接辞的用法である「梅もどき」[注7]等の例もあるように、現代語においてもモドクの「まねる」意を継承する例が容易に観察されることを考えれば、その原因は、それに加えて、さらに別のところにももとめる必要があるものと思われる。

例えば、動詞から形容詞が派生する場合には、意味のレベルで作用的意味が状態的意味に変換される必要があるが、どのような意味が状態化しやすいかという点では、それぞれ異なりがある。すなわち「意味変化のしやすさ」についても考慮する必要があるものと考えられる。この場合は、行為として「まねる」意と言葉で「非難する」意であるが、行為としてたどり示す意は、具体的な動きを伴い、多分に作用性が強く、形容詞の意味として不向きであったことに対して、一方「『自分だったらそのようにはしない』と口に出して言う」意は、言語活動を伴うとはいえ、比較的作用性の側面が弱く、もともと状態化しやすい条件を有していた。そのために形容詞の意味、すなわち「非難すべき（したくなる）状態である」意として継承されたのではないかと思われる。動詞モドクの「まねる」意が形容詞モドカシに伝わらず、「非難する」意のみが形容詞に伝えられた理由には、その使用状況以外に、このような「意味変化のしやすさ」にももとめることができるものと考えられる。

三

このように、モドク・モドカシは、いずれも中古になってから用例を拾うことができるのであるが、中古形容詞としてのモドカシの語義については、次のように、動詞モドクから伝えられたと考えられる「非難すべき（状態である）」意を基本的に表すものと考えられる。

（仲忠は）かたちより始め、交じらひたる様など、もどかしき所なく、才々しく、目も及ばずすぐれ出でたれば、

（うつほ物語・俊蔭）

（紫上は）すべて何ごとにつけても、もどかしくたどたどしきことまじらず、ありがたき人の御さまなれば、

（源氏物語・若菜下）

しかしながら、中古のモドカシの例のなかにはこのような状態的意味に留まらず、多分に情意的な意味を伴って用いられる場合がある。ここではそのような例について検討しておくことにする。

形容詞モドカシに伴う情意的な意味には、少なくとも二つの方向性があるものと思われる。そのひとつは、「苛立たしさ」を伴う場合である。

げに、よに思へば、おしなべたらぬ人の御宿世ぞかしと、尼君をもどかしと見つる子どもみなうちしほたれけり。

（源氏物語・夕顔）

「（伊周殿は）ただ今はいとかからでもと、知らず顔にてもまづ御忌の程は過させ給へかし」と、もどかしう聞こえ思ふ人々あるべし。

（栄花物語・巻第四・みはてぬゆめ）

これらの例は、いずれも非難すべき状態を表していることに変わりはないが、そのような状態を契機として一種の苛立ちが生じ、情意的な意味の生ずる余地が認められる。そこには、その状態と情意との間に緊密な論理的関係はなく、あくまでも対象の観察から読みとれる非難すべき状態を契機として、非難する者の心にある種の感情（苛立たしさ）が生まれるという契機的関係が認められるのみである。しかしながら、その感情を表すことに重点がおかれる場合は、もはや状態的意味ではなく「じれったい・はがゆい」等の情意的意味の例として、やがて承認されるようになってゆく。中古の段階では、そのような情意的意味を比較的強く伴う次のような例についても、やはり「非難すべき状態である」意として解釈が可能であり、情意的意味（じれったい・歯がゆい）としてのみ理解される例が現れる前段階にあると言える。(注8)

我ながらさももどかしき心かな思はぬ人はなにか恋しき（拾遺集・恋二・よみ人知らず）

（狭衣は）かかる思ひし重なりぬれば、浅ましく胸苦しきに、さりとて、たちまちに上の御心に従ふべき心地もせず。「さてこのままにてやみなん」ともおぼえず、さまざまに乱れまさりぬる心のうち、我にもあらずもどかしきこと限りなし。（狭衣物語・巻二）

このように、中古のモドカシは、「非難すべき（したくなる）状態である」意を基本としつつ、「はがゆい・じれったい」等の苛立たしさや焦燥感を伴う情意的意味を生じさせる場合がみられるが、それとは別に、少なくとももう一つ、別の方向性をもつ情意的意味を伴うことがあったようである。

（男が女を）「あな聞きにくや」とて笏して走り打ちたれば、「そよ、そのなげきの森のもどかしければぞかし」など、ほどほどにつけては、かたみにいたしなど思ふべかめり。（堤中納言物語・ほどほどの懸想）

ここは、ある貴族に仕える小舎人童とそれと同等の身分の女とのやりとりを描いた一節である。小舎人童は女に歌を読みかけたが、女が突き放すような内容の歌を詠んで返したので、男が「聞きづらいことを」と嘆きながら走って行き、女を笏で打つ場面である。「なげきの森」は、歌枕であるが、この場合は「投げ木」、すなわち笏で打つことを指す。女は嘆きながら笏で打った男のことを「もどかしければぞかし」と言っているのであるが、ここは「非難すべきだ」という状態的意味では十分な解釈ができないところであり、直接的には「そのように嘆きながら笏で打つところが嫌なのよ」と言い返しているものと考えられる。日本古典文学大系本『堤中納言物語』の該当個所頭注では、「それそれ、その（笏で打つようなな）なげきをお見せになるのがいやなのだから（あなたの言うことなど聞かれないの）ですよ」とあり、モドカシに情意的意味を積極的に見いだそうとする注釈が見受けられる。

中世以前の辞書を見ると、モドカシについての記述は見えないが、モドクについては、その幾つかに関係する記述が認められる。例えば、『色葉字類抄』（前田本）には、モドクについて、次のように記されており、同黒川本においても同様

の記述が認められる。

嫌（モトク）反謗也　談（同）｜人也　（前田本色葉字類抄）

「談」字については、観智院本『類聚名義抄』にも、「談モトク」とあるが、（注9）「嫌」字については、『新撰字鏡』において、「嫌　疑也支良不」（天治本）とあり、モドクは採用されておらず、代わりにキラフの和訓が見える。「談」字については、この語が「口に出して言う」意を表すところと関係するものと思われるが、「嫌」字については、『日本書紀』において、ソネム・ネタム等の古訓が見られ、この語がもつ情意的意味と関係するものと考えられ、また同時に、上記『堤中納言物語』に見られる形容詞モドカシの語義にも関係づけられるものと思われる。

同様に相手に対して、気に入らない・いやだと思う情意的意味を伴う例は、『枕草子』にも見える。

「こよなきなごりの御朝寝かな」とて、簾のうちになから入りたれば、「露よりさきなる人のもどかしさに」といふ。（枕草子・第　三六段）

男は（女に）、うたて思ふさまならず、もどかしう、心づきなきことなどありと見れど、さしむかひたる程は、うちすかして思はぬことをもいひ頼むるこそ、はづかしきわざなれ。（枕草子・第一二四段）

前者の例は、一夜を共に過ごした男が立ち去った後、残された女が寝ているところへ別の男がやってきて話しかける場面である。「露よりさきなる人」は、「朝露よりも早く帰った人」の意。名詞形モドカシサの例であるが、この場合のモドカシサは、男が朝露よりも早く帰ってしまったという「非難すべき状態」を契機として生ずる感情的意味がふさわしく、直接的には「にくらしさ」等の解釈があてはまるものと思われる。また、後者は先の「苛立たしさ」を伴う情意的な「じれったい・はがゆい」意、あるいは状態的な「非難すべきである」意としても解釈は可能であるが、「いやだ」等の嫌悪を表す情意的意味が含まれている。

以上のように、中古のモドカシに見られる情意的意味については、少なくとも「苛立たしさ」を伴うものと、「嫌悪の情」を伴うものの、二つの方向性があったものと思われるが、後者の嫌悪の情を伴う例は、多くは見いだされず、情意的意味を伴う例の多くは「苛立たしさ」を表すものに偏る傾向があると言える。したがって、冒頭の『かげろふ日記』の例について、これらの情意的意味を反映させる考え方もあり得て良いものと思われるが、それが現在、広く採用されていない理由は、注釈史上、中古のモドカシが基本的に表す「非難すべき状態である」という状態的意味で、この例を解釈しようとする見方が有力となり、それがそのまま支持されているためであると思われる。

おわりに

以上、「かげろふ日記」の一節に見られる例を手がかりに、中古のモドカシの語義について検討を試みた。論じ残したところは多いが、次のことは明らかになったことと思われる。①モドクの「まねる」意と「非難する」意との関係は、具体的な動きを伴う行為と言語行為との相違として捉えられること、②中古のモドカシは「非難すべき状態である」意（状態的意味）を基本とするが、同時にその状態を契機として生じた情意的意味を伴う場合が見られること、③その情意的意味には、「苛立たしさ」と「嫌悪の情」との、少なくとも二つの方向性が認められること、等である。

これらに基づいて、「かげろふ日記」の冒頭例について解釈を試みると、モドカシの語義については、中古の段階において「非難すべき状態である」意を基本とするが、そこには、多分に情意的な意味が込められる場合があるものと考えてよい。心理的に追いつめられた作者からみれば、兼家は、夫として父親としての思いやりや自覚に欠けると非難したくなるのである。したがって、「それなむいともどかしう見ゆることなれば」は、「（あなたのお父さんはよもやあなたのことを見捨てまいと思うのだけれど）そのことすらも（自覚がないと非難したくなる）じれったい状態だから」の意として、一応、

解いておきたい。結果的に『古語大辞典』の解釈を是とするものであるが、少なくとも筆者に対する社会的な非難と解く見方については、疑問があるものと思われる。

（注1）上村悦子編『蜻蛉日記解釈大成』第五巻によれば、「かたち異にても京にある人」を、出家しながら京で里住まいをして（いる人）の意とする解釈（三宅清著『かげろふ日記抄』〈著者蔵版〉）も見えるが、この解釈の場合、『こそは』が解けていない」との指摘（蜻蛉日記全注釈）もあり、ここは通説に従っておく。

（注2）なお、「それなん」の「それ」を作者と共に道綱も出家することとし、将来ある道綱を巻き添えにすることは「非難に値する」意としてモドカシを解く見方（『蜻蛉日記全注釈』）もあるが、すでに指摘のあるように、道綱までも出家すると解することは唐突であり、従えない。おそらくこの解釈は、モドカシを辞書上の「非難すべき状態である」意として忠実に捉えるために、その理由として「道綱の出家」がもちだされたものと想像される。

（注3）『角川古語大辞典』に示されている用例は、「わびしげなる車に装束わるくて物見る人、いともどかし」（枕草子・第二三七段）等、いずれも「非難すべき状態である」意として捉えられる例であり、対象を客体化し、その「よしあし」についてのみ言い表す評価的意味の例とは言い難い。したがってモドカシに評価的意味を認めることについては、なお考慮すべき点が残されている。

（注4）両義の関係については、上掲『日本語の年輪』において、「人の口まねをし手まねをして、ああした、こうした、ああいった、こういったとは、つまり人をあげつらうこと。転じて非難する意味になる」との指摘がある。

（注5）これ以外に「まねる」意を表す中古動詞モドクの例は、「やまもかく皆紅葉けりなどかのへ虫の鳴くねをもどくしらつゆ」（順集）が見えるが、管見の限り、この意味の例は、ほとんど見当たらない。

（注6）記紀にみえる審神者の流れを汲むものと考えられているが、このような「もどき」の存在は、動詞モドクに「真似る」意が、古くから継続的に存在したことを傍証するものと思われる。

（注7）現代語には「梅モドキ」「カマキリモドキ」等、「…に似たもの」の意で「…もどき」の名詞が造語されるが、このようなモドキの接辞的用法は古代にはほとんど見られない。複合名詞の後項として「非難」の意の「もどき」が用いられた「物もどきうちし、われはと思へる人の前にては、うるさければ」（紫式部日記）のような例は見られるが、名詞で「真似」の意を表すものは中古以前には見当たらない。鎌倉期に入ると「小侍従がもどきの句といひつべし」（古今著聞集・五）に見られるような、「真似・ま

がいもの」の意のような例が見えるようになり、やがて接辞化していったものと思われる。このような接辞「…もどき」の例は、採録語数の多い中世の文明本『節用集』にも見当たらないものの、次のように近世以降の資料においては、活発に用いられている。

鉢植の梅もどきを引切り　（西鶴織留・三）

…と言説正しく仰せける。浦人共舌をまき坊主もどきのせがれイヤこいつただ者ならず。　（用明天王職人鑑）

（注8）このような中古の状況は、やがて次の鎌倉期に、状態的意味が後退し、「じれったい・はがゆい」という苛立たしさを含んだ情意的意味が顕在化するかたちで推移してゆく。さらに室町期になると、次のような明らかに「じれったい・はがゆい」意として用いられたものと判断される例が現れることとなる。

「…あはれ侍や」とほめられ、いよいよ気色をまし、老の末座敷より進み出で、申しけるは、「ただ今の盃も、さる事にて候へども、あまりにもどかしくおぼえ候。大なる盃をもって、一つづつ御まはし候へかし」と申しければ、

（曽我物語・巻第一・奥野の狩の事）

（注9）『今昔物語集』では明らかにモドクあるいはモドカシと読める例は見当たらない。唯一次の「嫌」字が「モドキ（テ）」と読む可能性のあるものであるが、確かな例とは言い難い。

其国ノ守ニテ善滋ノ為政ト云ケル人、…（中略）…鳳至ノ孫ガ家ニ行居テ、日ニ三度ノ食物ヲ令備ケル。上下五六百人許有ケルニ、「食物ヲバ吉ク嫌テ食ヘ」ト教ヘタリケレバ、露モ愚カナルヲバ返シテ責ケレバ、

（今昔物語集・巻第二十六・能登国鳳至孫得帯語第十二）

（参考文献）

松尾聡・寺本直彦校注『日本古典文学大系堤中納言物語』昭三二・岩波書店
川口久雄校注『日本古典文学大系かげろふ日記』昭和三二年・岩波書店
池田亀鑑・岸上慎二校注『日本古典文学大系枕草子』昭三三・岩波書店
松村博司・山中裕校注『日本古典文学大系栄花物語』昭三九・岩波書店
中田祝夫・峯岸明編『色葉字類抄研究並びに索引』昭三九・風間書房

三谷栄一・関根慶子校注『日本古典文学大系狭衣物語』昭四〇・岩波書店
京都大学国語学国文学研究室編『天治本新撰字鏡（増訂版）』昭四二・臨川書店
阿部秋生他校注『日本古典文学全集源氏物語』昭四五・小学館
大野晋『日本語の年輪』昭四一・新潮社
正宗敦夫校訂『類聚名義抄』昭四五・風間書房
京都大学国語学国文学研究室編『塵芥』昭四七・臨川書店
校本万葉集刊行会編『校本万葉集』昭五四・岩波書店
中田祝夫・根上剛士編『中世古辞書四種研究並びに総合索引』昭五六・風間書房
犬養廉校注『新潮日本古典集成蜻蛉日記』昭五七・新潮社
松浦照子「もどかし」（『講座日本語の語彙』第十一巻）昭五八・明治書院
上村悦子編『蜻蛉日記解釈大成』平成元・明治書院
小町谷照彦校注『新日本古典文学大系拾遺和歌集』平二・岩波書店
室城秀之校注『うつほ物語（全）』平七・おうふう
吉田金彦『語源辞典（形容詞編）』平成一二・東京堂